大学病院の緩和ケアを考える会

ニューズ・レター　Vol.26 No.2
令和３年12月１日発行
大学病院の緩和ケアを考える会 事務局
〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8　昭和大学医学部 医学教育推進室
E-mail: jimukyoku@da-kanwa.org　http://www.da-kanwa.org
編集責任者 高宮有介

○ ご挨拶
○ 第27回総会・研究会開催を終えて
○ 準世話人リレー連載：
　大学病院の緩和ケアを考える
○ 参加報告
○ 第８回　医学生の緩和ケア教育のための
　授業実践大会に参加して
○ クールダウンエッセイ

ご挨拶　with コロナの新時代は？

代表世話人　高宮 有介（昭和大学医学部　医学教育学講座）

昨年からCOVID-19の影響で、皆さんの臨床や生活にも大きな変化があったと思います。現在、感染者数は激減しておりますが、オミクロン株の不安もあり、専門家は第６波が必須と警告しています。まだまだ、先の見えない不安との共存です。村上春樹氏の砂嵐という言葉が心に残っており、ご紹介いたします。「海辺のカフカ（上巻）」

『ある場合には運命っていうのは、絶えまなく進行方向を変える局地的な砂嵐に似ている。君はそれを避けようと足どりを変える。そうすると、嵐も君にあわせるように足どりを変える。君はもう一度足どりを変える。すると嵐もまた同じように足どりを変える。なぜかといえば、その嵐はどこか遠くからやってきた無関係な“なにか”じゃないからだ。そいつはつまり、君自身のことなんだ。君の中にあるなにかなんだ。

そして、君はじっさいにそいつをくぐり抜けることになる。そのはげしい砂嵐を。同時にそいつは千の剃刀のようにするどく生身を切り裂くんだ。何人もの人たちがそこで血を流し、君自身もまた血を流すだろう。温かくて赤い血だ。君は両手にその血を受けるだろう。それは君の血であり、ほかの人たちの血でもある。

そしてその砂嵐が終わったとき、どうやってそいつをくぐり抜けて生きのびることができたのか、君にはよく理解できないはずだ。いやほんとうにそいつが去ってしまったのかどうかもたしかじゃないはずだ。でもひとつだけはっきりしていることがある。その嵐から出てきた君は、そこに足を踏みいれたときの君じゃないっていうことだ。そう、それが砂嵐というものの意味なんだ。』

with コロナの新時代を見据えて進んで行きたいと思います。

今年６月に当研究会教育部会編著の「物語で学ぶ緩和ケア～みんなめざすチーム医療（へるす出版）」が上梓されました。主人公の令和太郎さんの語りか

ら、診断・治療・在宅・看取りを学べるテキストです。学生向けにイラストを随所に使用し、カンファレンス場面はLINEチャット風にしました。電子書籍でも読むことができます。是非、ご一読ください。

また、今年の第27回総会研究会は、昭和大学江東豊洲病院の小城原傑世話人と薬剤師の喜田昌記世話人主催で、2021年9月11日（土）に完全オンラインで開催しました。コロナに感染された呼吸器内科医師の語り、患者に寄り添う腫瘍内科医の講演など興味深く拝聴しました。また、主催者のリクエストで、私の鉄板講義「死から生といのちを考える」の時間を頂きました。医学部1年生時に、緩和ケアに関心を寄せてくれた小城原先生が、今回の開催世話人となり、感慨深い研究会となりました。両世話人と共に、ご協力いただいた江東豊洲病院のスタッフに感謝いたします。来年は、横浜市大の結束世話人、畑世話人、助川世話人を中心に鋭意準備中です。乞うご期待。

写真は総会研究会でのスクリーンショット。

第２７回総会・研究会を終えて

当番世話人　小城原 傑（昭和大学江東豊洲病院　消化器センター・緩和ケアチーム）
喜田　昌記（昭和大学江東豊洲病院　薬剤部・緩和ケアチーム）

寒さも深まる中、皆様いかがお過ごしでしょうか。夏までのCOVID-19の猛威は一旦落ち着きましたが、冬になり新たなオミクロン株が国内でも徐々に散見されるようになってきました。今後も感染防御を緩めることなく徹底して、罹患せずに参りたいものです。

さて先日2021年9月11日 第27回大学病院の緩和ケアを考える会総会研究会を開催致しました。今回はCOVID-19の影響を受け、直前で完全オンライン開催に変更となり、代表世話人の髙宮有介先生をはじめ世話人の皆様に多くのアドバイスを頂きながら、院内からも多くの先生方にご登壇いただき御助力をいただきました。準備段階から当院の緩和ケアチームのメンバーにもお手伝いいただきました。また何より、事務局の濱田様には多大な労力をおかけいたしました。皆さまのご協力とご指導があり、無事に(?) 総会研究会を終えることができました。誠にありがとうございました。準備段階では企業の協賛を得ることの難しさなど、通常診療や大学業務では知ることのできない貴重な経験ができました。特別講演では佐藤温教授、岡田壮令准教授、髙宮有介教授から、それぞれ大変素晴らしいご講演をいただきました。シンポジウムでは現場でのCOVID-19と急性期医療・看取りの成果と課題をディスカッションし、現場での多くの苦労を知りました。総会研究会を終え、後日多くの先生方からご好評をいただくことができました。ただ若手医師の参加は少数で、当院での緩和ケア教育において若手医師への啓蒙・普及が必要と感じました。

当院は2021年8月から日本緩和医療学会の認定研修施設となりました。今回の課題として若手医師への緩和ケアの教育を課題とし、施設研修指導医として緩和ケア医の育成に努め、大学病院の緩和ケアに貢献していきたいと思います。今後もどうぞよろしくお願いいたします。（小城原 傑）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「第27回大学病院の緩和ケアを考える会総会研究会」を通しまして、まずはこのような機会をいただき、代表世話人の高宮先生をはじめ関係者の皆様に感謝申し上げます。主催施設として小城原先生のサポートをさせていただいたことは、今後の薬剤師人生に大事な経験となりました。

今回のテーマである「急性期病院の緩和ケア」として、医師の立場より、佐藤温先生には腫瘍内科医としてがん治療と緩和ケアについて、岡田壮令先生の講演には自ら身のCOVID-19患者となった経験について講演いただき、そして髙宮有介先生による「いのちの講義」では、緩和ケアの原点に返り、医療者として引き締まる思いになりました。また、シンポジウムでは、日々ともに臨床現場で切磋琢磨している武田かおり看護師および遠藤実看護師と当院の集中力治療室における終末期ケアやCOVID-19患者に対する終末期ケアについて、あらためて振り返ることができ、今後の患者ケアに生かせる討議をすることができました。緩和ケアに携わる薬剤師として、今回の経験を臨床・研究に貢献できるよう邁進していきたいと思います。あらためてまして、参加いただいた方々に御礼申し上げます。（喜田　昌記）

☆準世話人リレー連載　大学病院における緩和ケアを考える～緩和ケア科を開設して

赤羽日出男（日本医科大学武蔵小杉病院　緩和ケア科）

2021 年 4 月 1 日より当院でも新たに緩和ケア科が開設され、部長を拝命いたしました。これまで緩和ケアチームとして主に入院患者さんを中心に緩和ケアを行ってまいりましたが、開設を契機に院内・院外に周知が進みました。非常に喜ばしいことです。

COVID-19 の影響で緩和ケアチーム依頼件数を昨年と比較することは難しいですが、2020 年が 44 件、2021 年が 225 件へと増加、月平均で見ると 3 月までが 17.3、4 月以降は 21.2 となっております。件数増加の要因としては主治医のみではなく、医療スタッフからの依頼提言が増えたことが挙げられます。これまで主治医に提言しにくかった状況もあったそうですが、新規開設によって依頼を促しやすくなったとのご意見を多く伺っています(まだ、主治医が緩和ケア依頼を拒むことがあるのだなと気を引き締める機会となりました)。

また、9 月に新病院移転に伴う電子カルテ導入によって、職員全員が改めて加算について学ぶ機会があったことも依頼件数増加につながったのではと推定されます。患者さんやご家族につきましても緩和ケア科があることに気づく機会も増えて、早期からの緩和を望まれる声に沿える機会がどんどん増えています。また、緩和ケア科開設によって外来診療を行う時間と場所を確保できたことも大きいです。これまでは場所と時間をやりくりして通院患者さんの緩和ケア診療を行わなければならなかった状況とは大きく異なります。プライバシーを確保し、ゆっくりお話を伺えることが安心して行えるようになりました。依頼にはできる限り迅速に対応し、信頼を積み重ねていくことを心がけています。

COVID-19 による医療への影響は大きく、今後は診察の機会を逸した進行がん患者さんの対応を迫られる機会の増加が懸念されます。更に、緩和ケア科が新たに開設されたにもかかわらず、緩和ケアチームの人員補給も依然として課題のままとなっております。専従の放射線治療医が不在のため、がん診療連携拠点病院の申請にも至っていません。新病院移転で手術室が増加され、麻酔科業務は多忙を極め、私自身も緩和ケア専任にとどまっております。依頼件数増加に伴い、兼任が多い緩和ケアチームメンバーの負担は相当なものとなってしまっています。そのような中でも、当院の特徴としての麻酔科的鎮痛法を維持できるよう後進の育成に取り組んでおります。課題は山積ですが、人材の育成を図り、10 年、20 年先を見越して対応を重ねて、日々の診療に当たってまいります。

第８回医学生の緩和ケア教育のための授業実践大会に参加して

昭和大学　医学部４年　小野向日葵

「第 8 回医学生の緩和ケア教育のための授業実践大会」では、「令和太郎さん」という 1 人の患者さんを軸に、医師との最初の出会いから在宅ケアの開始までの約 10 年間を追った。通常の講義では、患者さんの疾病前後の短い人生を切り取った事例から学ぶことが多いが、本セミナーでは患者さんの長い人生の経過を辿った。その「物語」から学ぶことは、実際の臨床現場で医師が「全人的医療」を行うために必要な過程でもあり、大変勉強になった。

今回はオンラインの利点が最大限に発揮されていた。背景は病室の写真であり、演者は役柄に合った衣装をまとい、臨場感を演出していた。まるで実際の臨床現場での対話に立ち会っているかのようだった。また、全国から参加者が集まり、様々な年代や職種で意見を交換し、討論できたことで新たな気付きがあった。

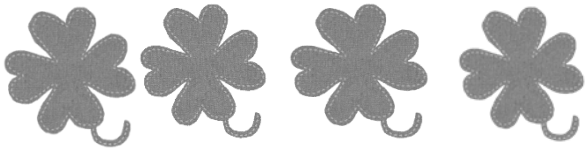
最初に、医師と令和さんの対話で、令和さんが教師であること、その人となり、家族構成、趣味などを知るところから始まった。私たち参加者は、令和さんの表情や声のトーンに注目し、親身になって考え、引き込まれていった。

バッドニュースを伝える場面では、悪い医師の見本のような態度が演技と分かっていても不快に感じられる程、巧みだった。

「意思決定支援・療養先の選定のカンファレンス」では、多職種の医療従事者が登場し、私たち参加者が緩和ケアチームの医師や看護師、令和さん本人、家族の役になり演技した。意外と医師の発言の場は少なく、「医師がすべての場面で必ずしも先頭に立つ必要はなく、チーム全体の調和を保つ中心的役割を担う」存在であれば良いのだと実感した。

最後に、訪問医師と令和さんの会話では、医師が令和さんの明るい表情に気付き、「自身の生徒たちに『いのちの授業』を行い、思いを伝えられたこと」を打ち明けられた。令和さんは、次の世代に「命のバトン」を渡せたのだった。

緩和ケアは、どのように死ぬかではなく、残された時間をどのように生きるのかを全力で支える医療である。患者さんとご家族の心残りが少しでも無くなるように、医療従事者として何ができるか、日々、心を砕かなければならない。私は Student Doctor として、臨床実習で様々な科を回っている最中である。今回のセミナーで痛切に感じたことをこの瞬間から始めていく。医師として働く際にも、患者さんやご家族の立場で「どのように伝えてほしいか」を常に考え、高い倫理観を有し、誰に対しても誠実に接し、最良の医療を提供していきたい。そして、患者さんとそのご家族、医療チームの皆など全ての
人を敬い、尊重し、大切にする
医師になりたいと思う。



安部能成（千葉県立保健医療大学）

第 59 回日本癌治療学会学術集会参加報告

第 59 回日本癌治療学会学術集会に参加したので、ご報告いたします。本学会は国立がんセンター東病院副病院長の林隆一先生を学会長に、パシフィコ横浜を会場として 2021 年 10 月 21~23 日に開催された。

昨年の第 58 回学会はコロナ禍にありながら国立京都国際会館においてハイブリッド開催されたが、250 人収容の会場にスタッフ込みで 10 人足らずの参加者であり、社会情勢を勘案すれば理解できるが、非常に寂しい状況であった。これに対して今回の学術集会は、ハイブリッド開催だけは同様だが、参加者は 200 名定員の会場に 20 人以上の参加者をお迎えできた。遠隔での参加者はその数倍あったようだ。学会当局の発表によれば 3 日間で 2,000 名を超える来場者があり、オンラインでの参加を含めると約 6,000 名に達したというので、会場に 20 名なら、総勢 60 名以上のご参加を頂いたことになる。

参加者の数字を見ても、昨年との状況の違いを見ることができるが、会場周辺の賑わいも昨年とは異なり、人の姿が多くなってきた。これは、会場へ向かう道中においても同様であり、京都と横浜の違いもあるだろうが、電車や地下鉄の中に人影が増え、駅を出入りする人も、また増えてきているようだった。当学会で座長を仰せつかったセッションは、がん患者に特有の骨転移について、整形外科（手術）、腫瘍内科（薬物療法）、放射線科（放射線療法）、リハビリテーション部門など、複数の診療科の先生方にご参集を頂き、多角的・診療科横断的に、骨転移に関する臨床課題について話し合って頂いた。各々の治療手段は異なるものの、進行がんとして顧みられることの少なかった骨転移患者に対する真摯なアプローチが話し合われたことは、診療科横断的・職種横断的をモットーとする本学会において、極めて意義深いことであった。本セッションの企画を進められた林隆一会長の御英断を評価させて頂きたい。

最終日の土曜日の午前中には CRC：Clinical Research Coordinator という専門職に対する教育講演、並びに認定式が執り行われた。専門職とはいいながら国家免許による資格ではなく、学会や職能団体の認定資格である。20 世紀に外科的治療を中心に展開した抗がん治療は、21 世紀を迎えて内科的傾向を強めてきている。内科の治療手段は薬物療法を中核としており、新規薬物の開発において重要な役割を担う CRC は本学会にとって重要な役割がある。しかしながら、その数は依然として低いままに留まっており、今後の我が国の抗がん治療の懸念材料となっている。

来年の第 60 回大会は群馬大学の調憲先生を学会長として、神戸コンベンションセンターで 2022 年 10 月 20 日~22 日に開催される予定である。